

江戸っ子の生まれそこない金を貯め。

この川柳の江戸っ子とは職人をさすらしい。いろんな解釈があるらしいが、読んで腑に落ちたのは、じぶんの腕に自信のある職人ならその技術で食ってゆけるのだから金なんか貯める必要はない。自信のないやつにかぎって、いつ食いつぶされるかわからないので金なんぞ貯めやがるんだ、という説である。

高校時代から作家になりたかったが、小説でめしを食ってゆけるほど才能があるとは思えなかったので、手に職をつけるべく医者になった。いまよりもはるかに医師が不足していた時代だったゆえ、需要と供給の関係で決まる勤務医の給与は比較的高かった。その代わり、夜間の呼び出しはほぼ毎日で、心身の疲労は甚だしく、給与の高い仕事はリスクも高いのだ、との世間の常識が若造の身に深くしみた。

こんな仕事を続けていたら若いうちに死んでしまいそうだから、やりたかったことは早めにとっておこうと小説を書き始めた。二足のわらじをはいたわけだが、片方にばかり重心をかけるとすり減ってしまいうえ、なんとかバランスを保ちながらきょうまできた。

どちらも手に職をつけたはずで、冒頭の川柳にしたがえば金なんか貯めずともよかったはずだが、常にいくばくかの預金がないと不



絵・江口修平

手に職、なのにお金

南木佳士

安だった。腕に自信がないのはもちろんだが、それよりも、明日、五体無事でいられるのが常に気にかかった。

医療現場で目にする他者の病や死は、基本はおなじ身体構造のわが身にも起こるのは必定で、それが明日でないという保証はどこにもない。急な病を得て戸惑ったり、亡くなるひとたちを毎日見ていればそういう冷酷な事実が強く自覚されるのは当然で、いつしかこの不安感が生活のすべてを支配するようになり、四十前後から五十歳くらいまでは鬱々として楽しめなかった。

それが、還暦をすぎると、もうどうでもよくなって、医者としても作家としても、とにかくきちんと毎日仕事していれば、お天道様と米の飯は付いてくる、の心境に至った。そんな生活がある日、終わる。それはきわめつけの必然なのだ。

あと、川柳のような生き方ができなかったのは、田舎で生まれ、田舎で暮らしたからにほかならない。生きることには必ずともなうグロテスクさを隠ぺいする余裕のない田舎暮らしは、江戸の粋からは縁遠いが、しぶとく、したたかに生きのびる技術を教え、薄っぺらだった二足のわらじを不格好だけれど頑丈に編み直してくれたりもした。

なぎ・けいし●1951年群馬県生まれ。作家・医師。長野県佐久市在住。『ダイヤモンドダスト』（芥川賞）、『草すべり』その他の短篇』（泉鏡花文学賞、芸術選奨文部科学大臣賞）など。本年、還暦記念出版として2月に『熊出没注意 南木佳士自選短篇小説集』、9月に『猫の領分 南木佳士自選エッセイ集』（いずれも幻戯書房）を刊行。

